
魔法少女リリカルなのはStS

はろると

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはS t S

【Nコード】

N 6 3 8 2 N

【作者名】

はるるど

【あらすじ】

新暦74年、ある惑星でひとつの出会いがあった。その出会いはこれから起こるある出来事の内容を少しだけ書き換える出会いだった。果たして、この出会いの先に待つ未来とは……

この小説は、なのはS t Sの話にオリキャラを介入させて進行していくお話です。原作ブレイクや、オリキャラとか無理っす、という方はお気をつけください。

く正義の意味、悪の意味く（前書き）

まずは、このページを広げてくださってありがとうございます。

この作品は小説なぞ書いたこともない作者がこのサイトに触発されて勢いで作り上げた小説です。

あらすじにもあるとおり、オリキャラ中心で話が進んでいきますので、ご注意ください。

最後に、この000話に限っては原作キャラが「一切」出てきませんので、重ね重ねご注意ください。

それではどうぞ。

「正義の意味、悪の意味」

あるところに一人の少女がいた。

歳は18くらいで、少女と言うよりは女性と呼んだほうが相応しい容姿をしている。揉み上げだけ伸ばしたショートカットの髪型で、顔つきからはとてもおとなしそうな印象を受ける。そんな彼女は辺りをキョロキョロと見回しながら今現在森の中を歩いていた。

「今回は余り人気が無い場所に来てしまったようですね・・・」

ガサガサと足を踏み出す度に落ち葉が音を立て、周囲にはその音だけが虚しく響いている。彼女の少し不安げな声も、すぐに広大な空間が呑み込んで、辺りは吹き抜ける風の音ぐらいしか聞こえてこない。

今彼女が歩いているのは、所謂「獣道」と呼ばれるような普通ならあまり歩かないような道である。背の低い木々が僅かに拓けているだけの、狭くデコボコな道。そんな中を、彼女は枝で体を傷つけないよう気をつけながら歩いていた。

そうして歩き始めて幾らかした頃、彼女は草木の少ない場所を見つけるとそこで一度足を止め、腰から一冊の分厚い本を取り出した。外見はオレンジ色で、表紙には金色の剣十字が装飾されており、その中心にはオレンジ色の宝石が埋め込まれている。

「あまり疑いたくはないですが・・・来る場所を間違えてはいないですよね？」

胸の辺りまでその本を持ち上げ、彼女は本に向かって疑問を投げかけた。すると、剣十字の中心に埋め込まれた宝石が白く光を放ち始め、

『ご安心をマスター。この先で間違いありません』

そう言っただけで彼女の問いに答えた。

「そうですか、なら良いのですが・・・せめて方角だけでも示して下さいませんか？流石にこの格好は森を歩くのには適してないのだけど・・・」

そういつて彼女は一度自分の身体に視線を巡らす。赤い胸元が少し広いアンダーシャツを着ており、その胸元周りには何か紋様の様なものが装飾されている。その上からマントを羽織り、同じ色のスカートにロングブーツを履いた格好は、何処かの民族衣裳のようにも見えた。しかしその格好は、彼女の言うとおり森の中を歩くのにはあまり適した服装とは言えなかった。羽織ったマントにはいくつもの枯れ葉や小さな枝が付着しており、コレまでの彼女の苦労が伺えた。

『方角はこのままで大丈夫でしたので特に提案しませんでした。距離にして約50m、時間にしたらおよそ2分で目的地に着きます』

目的地までの情報を提供してくれた本に「わかりました」と感謝の念を送りつつも、どうして最初に言ってくれなかったのだろうか？と、どこか府に落ちないような表情を浮かべ彼女はまた歩き出した。あと2・3分がなければ目的地なのだから、そこで少しくらい休もうという決意を胸に秘め、彼女は森の中を進んでいく。

そうして進んで行くと目の前に高々とそびえ立つ岩肌が現れ、行き止まりとなってしまうていた。驚いた彼女は崖に手を突き空を見上げる。そこには、雲に届くのでは？と思わせるほど高々と伸びる岩肌があり、その頂上はあまりの高さに霞んで見えるほどだった。

『主、もう少し左です。そこに入り口があります。』

どうしたものかと考えていると、腰に下げ直しておいた本から案内が聞こえた。左手を見ると、確かに一箇所洞窟の様な穴が開いている部分があった。言われるがままに、彼女はその穴の方へと足を進めていく。そして、穴の前で足を止め中を覗き込む。入り口付近は日光のおかげで足元がしっかり見えるが、奥のほうはその光も届かず、真つ暗な暗闇が続いていた。

「……………ここですか？」

『ええ、この洞窟の奥に数人の生体反応が感じられます。ハンターの一行か、もしくはとても少規模な部族でしょう。とりあえず行ってみましょう』

「それは…………大丈夫ですか？」

むしろイロイロ危険なんじゃないだろうか？そうは思ったが、なんの迷いも無くここが目的地であると断言されてしまったては、それ以上尋ねることもできず彼女はもう一度穴の中をのぞく。彼女とて何の理由も無くこんな辺鄙な場所を探索していたわけではない。ある目的を持ってあの森を抜け、ここまで来たのだ。しかし、暗く先の見えない洞窟は人の本能的な恐怖を煽るには十分すぎる雰囲気を持っていた。

そうして1分ほど洞窟の奥と睨めっこした後、ひとつ大きく息を吸い込んだ彼女は一步を

『…………マスター少々お待ちを』

……踏み出せなかった。踏み出そうとした足を無理やり止めたせいで軽くバランスを崩してしまい、入り口の縁に手を着くような体勢で体を支える。一息ついたあと、前のめりになった体を起こし、折角踏み出した一步を止めてくれた犯人を腰から取り外す。文句のひとつでも言ってみようかと考えてみたが、本に目を向けると、表紙で剣十字の中心の宝石がまるで何かを確かめるかの様に緩やかな明滅を起こしていた。

『申し訳ありません。ですが解析した結果、この中には高濃度のAMFが敷いてあることがわかりました。どうやら、ただ人数が少なだけではなさそうですが目的に変更はいらないでしょう。とはいえ、主一人ではなにがあるかわからないでしょうから守護騎士たちを起動することをお薦めします』

その言葉を聞いて、彼女の顔に少しの驚きが現れる。

アンチマギックファイルド

彼女も魔法の扱いにはそれなりに自信があるが、AMF下では魔力行使にいつも以上に手間がかかるだろうし、もし中で体術に優れた何者かに襲われれば、普段は後衛を務める彼女ではひとたまりもないことは明白だった。そうなってしまつてはココまで来たのに目的が果たせなくなつてしまふ。それでは意味がないと理解していた彼女の決断は非常に早いものだった。

「そうですね、お願いします。……あ、でしたらセリ力はまだ起こさなくて良いですからね？」

『わかりました、ローレルとジェミニットを起動します』

会話が終わると本に埋め込まれた宝石が一際輝き、本を持つ彼女の足元に三角の魔方陣が出現した。さきほどまでの静寂とはうって変わって、流れる魔力の奔流で辺りの木々がざわざわと音を立てる。そんな中、その中心に立つ彼女は目を閉じ、顔を伏せ、意識を集中させている。

「・・・>>日輪の魔導書<<の主、コロナの名の下に命ずる・・・
我が魔導書に在りし剣と盾よ・・・我が元に顕れ、我と共に駆けよ・・・」

彼女、コロナがそう言葉を紡ぐと足元の魔方陣の輝きが強まる。それと共にあふれ出る風の強さも次第に強くなっていった。しばらくして、風と光が収まりコロナが閉じていた目を開くと、目の前に2人の女性が立っていた。一人はコロナよりもほんの少し背の高い女性、もう一人は逆に彼女の肩ほどの身長しかない小柄な少女だった。

「おはようございますローラ、ジェミニ。折角休んでもらっていたところを申し訳ありません。」

コロナがそう声をかけると、ローラ、ジェミニと呼ばれた二人は目を開いた。

「いえ、我らは守護騎士。本来なら休みなど頂くことの出来ない身分でございます。こうしてわずかでも休息をいただけたのですから、感謝しております」

そう仰々しい挨拶をして頭を下げたのはローラと呼ばれた女性である。170cmほどしかないコロナよりももう5cmほど高い身長をしており、その体つきは非常に女性らしいものだ。紅い髪を動きやすいようポニーテールにしており、服装は黒のインナーに、前に裾を延ばした独特の形状をした淡い紫色のシャツ。その上から白のショートジャケットを羽織り、腰には後ろ半分を隠すような足首まであるスカートのようなものを身に着けている。

「そだよ、主のおかげであたしも久々にのんびりできたからね。このお礼はしっかりと働くことで返すね!!」

そう元気よく手を挙げてお礼を言ったのはジェミニと呼ばれた少女である。150cmほどしかない小柄な体。その活発そうな印象を引き立てるように金色の髪はツインテールにしてある。服装は、薄い黄色のシャツにホットパンツを穿いており、手首と胸部には金色をした装飾品が着いている。その上から服と同じ色をしたショートジャケットを着た彼女は、昔話に出てくる小人のようであった。

「ジェミニネット、主の厚意に対するお礼ぐらいちゃんとしろ。そのような態度では守護騎士の名が泣くぞ」

「なによ、お礼はちゃんと言ったモン！それに、いつも主だつて『もつと気楽に話しても良いですよ』って、ずうううううううううううつと前から言ってるじゃん？ローレルの方こそもうちょっと頭を柔らかくしたらどうなのよ」

フン、ツといった感じに顔を背け、それをジト目でみるローラ。そんな様子を苦笑いで見つめていたコロナだったが、これもいつものことだと思い、今の状況を2人に説明した。2人はコロナの話を聞き終わり状況を理解すると

「そういうことですか・・・わかりました。ジェミニネット、私が先陣を切って進む。お前は主の傍にいて何が起きても大丈夫なように気を張っておけ。」

「りょーかい！」

先ほどまでのやりとりなど無かったかのように2人は洞窟へ入る準備を始めた。いつも出会い頭には軽い口喧嘩をするが、いざ行動を共にするととなると、とても息のあった動きでコロナのことを守ってくれる。そんな2人を彼女は心の底から信頼しきっていたし、守護騎士である彼女たちもその信頼に応えるべく己の役割を全うすることを誓っていた。

そうして3人は、先の見えぬ洞窟の中へとそろって足を進めていった。

ゝ正義の意味、悪の意味ゝ（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。お目汚しになつてしまった方はすいませんでした。

この話を書いていて、文章でいろいろなことを表現するのって難しいな、と感じつつ溢れ出るMOU SOUを止めきれずに投稿してしまいした（苦笑）

読んでいただけた方で、感じたことがあれば感想欄でご報告ください。作者の勉強になります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6382n/>

魔法少女リリカルなのはStS

2010年10月28日05時09分発行